
返り咲くこと風花の如し

真羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

返り咲くこと風花の如し

【コード】

N8670P

【作者名】

真羅

【あらすじ】

ひよんなことから異世界へ

わたしは至って普通の女子高生、國見真綾。

運動が得意ってわけでもなく…

飛び抜けて美人ってわけでもなく。

学校一の秀才っていうわけでもない。

学校へ来たら昨日のテレビ番組で盛り上がったりと他愛のない会話を傾ける。

どこにでもいる平凡な女子高生。

「雨…やまないね」

雨は校庭に小さな水溜まりを作っていく、ぬかるんだ地面を教室の窓から見て呟いた。

夏の湿気た空気が鼻腔に流れ込み小さく顔を歪めた。

「ホントだねー。これじゃあ今日は室内で筋トレかしらね」

嫌そうな声音で友人の竹下佳江は腕時計に目をやり、両手を組み合わせて頭を下げてきた。

「ゴメン真綾！キャプテンに用事で今日は休むって言うてもらえなくない？」

「ダメダメ！キャプテン知ってるのよ？佳江がズル休みしてるの」

今まで、教材を鞆に入れていた佳江は真綾の言葉に動きが止まった。

そんな佳江を横目に真綾は、なおも続けて言った。

「佳江、雨の日の筋トレ絶対に来ないって。キャプテンばやいてたよ」

「あつ」

「それに、今回わたし用事で不参加だから。前からキャプテンには連絡済み」

真綾はにつこり微笑んで鞆を閉めて肩で持った。

がつくしと肩を落とした佳江は教室のロッカーからトレーニングウェアを取り出した。

「頑張つてね」

佳江の背中をポンと叩いて真綾は教室から出て行った。

靴箱に向かい教室で見た時よりも勢いよく雨打つグラウンドを見て持ってきたビニール傘を開けた。

何気なく顔を向けたどんより曇る空。

ピカッ

赤い光が住宅街に落ちたのが見えた。

「今の…隕石?!」

何故だが、ソレを見た瞬間胸が高鳴ったのがわかった。

平凡な毎日。

何か変わったこと、非現実的な刺激が欲しかった。

わたしは、光のあとを追うために普段通らない閑静な住宅街へと

向かった。

入り組んだ住宅街を誰かに導かれているみたい。。。
いつの間にか木々に囲まれた空き地に辿り着いていた。
雨のせいもあってか周囲は不気味なぐらいの静けさで、ここだけ
時間が止まってしまったかのように不自然だった。

真綾は空き地に視線を向けると黒い布切れにくるまれた物体が空
き地の中心に落ちていた。

恐る恐るそれに近づいて覗き込んだ。

遠くからだとわからなかったが布切れから雨に濡れた金色の髪が
光って見えていた。

「うそ？人?!」

近づく事で、それが人だと言うことに気づき真綾は狼狽えた。

「だっ…大丈夫?!」

駆け寄り横たわるソレを抱き起こそうとした時—————

「僕に触れるな」

そう冷たい声が発せられ
布切れにくるまれたソレは、のっそりと起き上がった。

身長130センチ程の金髪碧眼の男の子。
布切れのしたは、見た感じどうやら何も身に着けていないようだ。

「…ここは…どこだ？」

金色の長い睫毛に縁取られた大きな碧い瞳は数回瞬いたが、どこか虚ろで。

そのままフラリとぶっ倒れてしまった。

鼻孔をくすぐる甘い薫りに目が覚めた。

バスタオルにくるまれ、ソファで横になっている事に気づいた。

周りに目をやると、きちんと片付けられた室内。

自分の部屋より幾分どころか随分小さいが…

「まあ…平民つてところだろう」

「あつ…目、覚めた？」

パタパタと足音を立てて目の前に座った黒髪の少女。

「大丈夫？君…空き地でぶっ倒れたんだよ」

「…お前が助けてくれたのか？」

「お前って…君ねえ！一応わたし、君よりお姉さんなの。わかる？」

そう言って真綾は軽く注意した。

小学一年生ぐらいだから年上に敬語使うなんて気づかないをだろ
うけど。

ダメよね！お前だなんて。

「わたしは、真綾」

「ふん。僕に関係ないお前の名前なんか」

「むっ」

ふんぞり返ってソファに座る少年を見て…なんとか自分を落ち着
けさせた。

相手は小さな子供だと。

「おい。気のつかないヤツだな。喉が渴いた」

「……あんたねえ〜！！」

「あ？ああ…空き地で倒れているところを助けてくれた事には感謝
している」

「で？あんたの親は？」

こゝんな生意気少年の親なんて、どうせロクなもんじゃないわ。
どんな親か見に行つてやる。

「……」

「もしかして家出……？しかも真っ裸で？」

半笑いになる顔を引きつりながらも少年に問い質す。

「わからない。気がついたらあの場所について……」

さっきより幾分か大人しくなった少年に母性本能とやらが作動したのはいうまでもない。

やっぱり何だかんだ言っても小学生だもんね。

……

……

ってちがーう。

「あんた記憶喪失？！うわーん。まどろっこしいの拾って帰って来ちゃった！！」

「人を何かの動物みたいに言うな」

「あーハイハイ」

立ち向かって来る少年の頭に手を置いて押さえつけ、手近にある子機の電話をとった。

「……何する気だ」

「けーさつよ。警察に電話して保護してもらおうわ」

ピッピッ

すっ

「アレ?!電話…」

今手に持っていた電話が消えたのだ。

「警察沙汰は困ります」

少年とは違う低い声が背後から聞こえて振り返った。

「ダート!!」

少年は、ソファから脱兎の如く駆け出し、ダートと呼ばれた青年に抱きついた。

「殿下…申し訳ございません。殿下に急襲がありました。咄嗟に安全な場所へと回路を繋げたのですが…」

「城のみんなは?父上は?母上は?!!」

「両陛下共、ご無事です。狙われたのは殿下の方です」

二人のやりとりに頭がパンクしそう。

何…この目の前で繰り広げられている展開は…

「ええっと…もう解決したのかなあ〜」

恐る恐る二人の会話に入り聞いてみる。

「ああ！貴女が殿下を助けて下さったんですね」

黒髪の灰色の瞳は目を細めながら、わたしに近づきガシッと抱きしめた。

長身瘦躯の青年。

あっ…見た目、細いのに結構…筋肉ついてる。

って…というか異性にこんな風に抱きしめられた事がなくて心臓があ

…！！

グイッと、わたしと青年の足元に割り込んでくるもの…

「ダート！いつまでそうしてる」

少し苛立った少年は、わたしを睨みつけながらダートと呼ばれた青年を見上げた。

「はいはい殿下」

ダートは、そう言って両手を前に突き出した。

光の粒子が、ダートの突き出した両手周囲に集まり、それがみるみるうちに細長いシルエットを映し出した。

「貴女の名前を聞いても？」

「僕が知ってる。ダートは知る必要ない」

「はいはい殿下。では、また御礼は後程…」

ダートは微笑みながら光の粒子が形作った杖を振りかざした。

その瞬時、室内の床に幾何学的な紋様が浮かび上がった。

何だかよくわからなかったが、やっと収まるのだと思いフラフラと力なく手を振ってみせた。

「おい」

不意にそう言われて視線を下に向ける。

腕を組み偉そうに見上げる碧眼。

「手をかせ」

「むっ。最後まであんた生意気少年ね」

癩だが、言われた通り手を差し出した。

スツと真綾の細い手首を持ち、手のひらの付け根に唇を押しつけた。

一瞬チクリとして手を引つ込めた。

すかさず、少年を見ると、してやったりの表情で…

ダートはと言うと、手で顔を覆い苦笑していた。

「ちょっと、何したの?!」

自分の手首を見て驚いた。

ピンク色の小さな痣が出来ていたのだ。

再び顔を上げると、既に二人の姿はなかった。

「一体あれは何だったの…？」

一度自分の頬をつねって見たが痛かった。
夢ではなかったって事よね？

「おはよー」

「おはよう…」

昨日の出来事が本当に夢みたいに、今日もいつもと同じ朝。
授業を受けに学校へ
授業が終わると放課後はクラブへ。
いつもと変わらない毎日。
刺激的な事なんて何も無い。

「聞いてよ真綾！」

「昨日の筋トレどうだった？」

「最悪よ！キャプテンにしごかれまくりよ〜」

お陰様で筋肉痛。とぼやいた。

「ところで昨日、どうしてクラブ休んだの？」

「アメリカからのエメール…昨日届く予定で」

「あ！真綾の両親からの？」

「うん。けどちょっと色々あって結局見れなかったの」

そう…色々有りすぎて…

あれこそが、わたしの求めていた平凡ではない日。

一日経った今も残る痣に顔をしかめた。

光の渦が地面から湧き上がり、その中から現れた二つの影。

「父上ー！母上ー！」

渦から飛び出してきた少年は、見知った城内を駆け出した。

「ガウディオ殿下！」

ダートが止める声も、虚しく広い回廊に響いた。

長い長い回廊を走り、何度となく侍女や守衛とぶつかりかけたが
誰も何も言わない。

何故なら彼は、このアヴァンシア帝国の王子だからだ。

一際、豪華な扉の前に辿り着き大きく深呼吸した。

「父上入ります」

遠慮がちなノックの後にそう言って返事を待った。

「無事だったのかガウディオ?!」

待っていると勢いよく扉が開け放たれて口髭をはやした壮年の男が飛び出し続いて淑やかな女性も現れた。

「ガウディオ…!よく無事で」

涙で目を晴らしたその人は、ひしつとガウディオを抱きしめた。
遅れてダートが回廊を走って来て片膝をつき、頭を下げた。

「両陛下、只今帰還致しました」

「ああご苦労であったダート」

「ダート…迷惑をかけてしまいましたね」

女性は流れる涙を拭いガウディオの額にキスを落とした。

「いえ自分の不注意で殿下を危険な目に遭わしてしまいました」

「でも、そのおかげで僕は見つける事が出来た」

「何をだ?ガウディオ」

「成人の儀」

「まあまあ…ガウディオったら見つけたのね？」

「はい母上。二年後迎え入れたいと思います」

その時まで…

真綾…

驚くだろうな。

でも、お前に拒否権はない。

あの痣が消えない限り。

ガウディオは薄く微笑んだ。

いつもクラブが終わるのは19時15分。

そのままトレーニングウェアで帰宅する。

家は学校から歩いて来れる距離。

いつも家の電気は真っ暗で…

ポストに手を突っ込む。

アメリカに仕事の都合で行っている両親から時々エアメールが届く。

その時が一番嬉しい。

「ただいまー」

返事はない。

いつものこと。

リビングに向かい

昨日届いていたエアメールを探した。

本当突然現れて突然消えてしまった不思議な人たち。

他人にこの事を言ってしまうても良かったのだからけど……わたしは、したくなかった。

きつと世界でわたしだけだと思ったから。

こんな奇妙な体験をしたのは。

だから、それを話して信じる信じない関係なく

わたしは誰とも共有したくなかったんだと思う。

やっと見つけたエアメールの封筒を切り中身を確認する。

両親の直筆の手紙と二人仲良く写った写真が入っていた。

普段メールばかりだけれど両親の直筆の手紙は、また違った意味で嬉しい。

わたしは早速写真を部屋のコルクボードに貼った。

次の日もまた次の日も、特に何の変哲もない毎日を過ごしていた。

「ねえ…噂で聞いたんだけど」

夏の日差しが少し弱くなってきた頃、文化祭の準備中に竹下佳江は手を止めて話して来た。

六限目の時だ。

「何を？」

「前々から不思議だったんだよね！真綾って彼氏いるの？」

その思いがけない言葉に、真綾自身豆鉄砲をくらった鳩みたいな顔をした。

「なっ！何を急に改まってって思ったら…」

「だっておかしいじゃない？みんな言ってるわよ？」

「何を？わたしは聞いてない」

「告って来る男子をことごとく振ってるんだって？」

「！？なっ…何で知ってるのよ？」

「有名よー」

そう言って作業を再開し始める佳江。

「わたしも、よくわかんないんだよね。別に付き合ってみようかなあと思って返事しようとするんだけどね…」

何故か邪魔が入るのよ。
嫌で断っているわけじゃないのに…

あれはつい最近のことだった。

「國見…!!」

それは、クラブが終わって道具を倉庫に持って行く時だった。

「?あつ!相川先輩」

声をかけてきたのは一ヶ月前、二年の相川稔先輩だった。

「どう?慣れた?」

「はい。中学の時も硬式だったので」

「へえ、珍しいね。中学は大体軟式だと思っていたよ」

陽に焼けた肌と髪。肩まで捲った袖から見える程よくついた筋肉。

「先輩は中学の時は…」「あのさ國見!」

会話を中断されて、横に並んで歩く相川を見た。

頭を掻き照れくさそうに視線を外して

そして

「國見！俺…ずっとす」「あぶない！！」

周囲のざわめきに異変を感じた真綾は、相川の周りに視線を巡らせた。

遠くの方から丸いものが見えた気がした。

そう思ったとき、空から降ってきた野球部のボールが、横に並んで歩いてきた相川に直撃してしまった。

幸いも当たった場所が頭部ではなく背中だったので大事にはいらなかった。

「相川先輩?!」

気を失った相川先輩は、その場で崩れ落ちてしまつて…

駆けつけた野球部員と顧問の先生に運ばれて行つた。

他にも、校庭に呼び出されて話を聞いていたら窓から誤って花瓶を落としてしまい相手に直撃したり。

たまたま階段を上っている時に声をかけた男子がいて

告白とかそんなの全くないのただ体育祭の打ち合わせで話しかけてきただけなのに

彼は何もない所で足を滑らせて階段から落ちてしまった。

こんな事が続くものだから、最近では誰もわたしに声をかけて来なくなつた。

一通り、わたしの話を準備しながらでも佳江は静かに耳を傾けてくれていた。

「それって何か憑かれてるんじゃないの？お被い行つた方がいいつて！」

「うん…」

そんなんじゃないと思う…

わたしは、あの少年が別れ際に付けて行った痣を見た。

徐々に色づく、この痣は時々痛みが生じる。

異性と話している時に限りだけど

「やあーつと…六限目終りね」

チャイムが校内に響き佳江は、待っていましたとばかりに鞆を取り出して教科書を片付け始めた。

「今日は職員会議だからクラブはないねー！ね！久々買い物行かない？」

「そうだね久々だし行こっか」

「殿下…」

「何だよ、ダート」

「いえ…」

徐々に、成長していくガウディオ殿下。

つい先日、地球に降り立った時は、五、六歳の少年だった。身長も低く可愛らしかったのに。

今では反抗期に入りかかり最近ほとほと手を焼いている。生まれて五年で成人男性となる。

この世界の皇族たち…

それは巨人族の定め

流れる血筋…

巨人族だからと言って身の丈何十メートルになるわけではない。

「殿下…あまりいい趣味とは言えませんよ？」

「何がだ？」

「水晶球で何を見ているんです？」

「……」

「彼女には彼女の生き方があります。あと一年半の辛抱です」

「しかしだなあ…!!」

キツとダートに睨まれ一瞬怯むが、勉強の事をこのあと指摘されるとダートの言うことには逆らえない。

真綾をこちらの世界に呼ぶためには、俺が…あいつを守っていく力が必要になる。

その為には父上の後を継ぎ、絶対的地位を獲得しなければならぬい。

俺は、震える手で水晶球を床に落とす。

「今は、真綾を受け入れる事だけを考えて勉学に励む」

「その意気ですよ殿下！」

そして、歳月は流れに流れ。

わたしは高校三年になった。

クラブも引退し、受験に向けて皆がピリピリし始める時期に差し掛かった。

「えーっ?!どーゆう事?!」

パソコン画面にへばりつき、何度も羅列した文章を読み返す。

「今度の転勤先は、オーストリアですってえ!!」

羨まし過ぎる!!

こんなんだつたら、わたしもついて行けば良かった!!
と言うか、今回で日本に帰ってくるはずじゃあ…

それでなくても、就職が進学迷ってる大事な時期なのにいゝ
しかも、もう就職組はほとんど内定貰ってるし…

まあ…一応こうやってメールで相談してるから特に問題ではな
ったりするんだけどね。

一応進学って事で進路に出してるし。

「……オーストリアの写真期待してます」

キーボードをカタカタ鳴らし、返信した。
送信ボタンを押して完了の文字が表示された。

しかし、一向に消えない文字。
いつもなら新たなメール画面に切り替わる。

「あれ？フリーズしちゃった??」

そう呟いた瞬間

忘れかけていた、あの眩い光が部屋を照らした。

目の前に広がる光が収束していく。

目が周囲に馴染んだ時、ピュツと首筋にあてがわれた冷たい刃先に肩を震わせた。

「なっ…！何て物騒な物出して…って何処ここ!？」

後ろに立っているであろう人物は、わたしをいきなり床に押し付けて叫んだ。

「闖入者だ!!衛兵!」

「ちんにゅーしゃですってえ!!」

ま…確かに闖入者だろうけど…って一体全体本当に何処よここは
!!

背中を床に押さえつけられて、冷たい石の床に顔をつけて真綾は必死にもがいた。

ガチャガチャと目の前のＴ字路の廊下から現れた武装した集団。

何故だか、捕まったら危険だとアテにならない、わたしの勘が働いた。

仲間が来て気を緩めたのか、わたしを押さえつけていた男の隙を突いて集団が向かって来ている方向とは逆の廊下を走り出した。

「くそっ！！逃すなっ！！」

ひえええっ！！

追いかけてくるよ…！！

振り返って叫んだ男を見た。

銀髪に群青色の瞳。

背が高く、かなりの美丈夫。

って言うかここは外国？！

もう何がどうなってるのよ

テニス部に所属していたので体力には自信があった。

けれど引退してもう何ヶ月たつだろう。

それに相手（追いかけてくる者）は男。

追いつかれるのも時間の問題だろう。

相当走っている気がする。

開けた庭らしき場所に出た。

ガチャガチャ鳴る音がする。

思わず近くにあった茂みに隠れた。

「こっちに向かったと思ったが…」

「どこに行きやがった？」

「ちょこまかとネズミみたいに…！」

「どうした？騒がしいぞ」

庭に響く凜とした低い声。

一瞬にして静寂が訪れた。

チラツと茂みの隙間から様子を窺う。

頭を垂れて跪く追いかけて来る男たち。

手前に立つ男の方が位が高いのだろうか。

華美な服装の男性は後ろ姿で顔はよくわからない。

金髪だという事は理解出来た。

そしてその男性の横に並んで立つ女性。

男性と同じくフリルがたくさん付いた華やかなドレスを身に纏い、
儂げな感じが後ろ姿でもわかる。

ああゆう女性を男の人って庇護欲をそそり、大事にしたいって思
うんだらうなあ。と思った。

「それが、陛下」

一人が言葉を発し様とした時、銀髪の男が現れた。

「闖入者だガウディオ陛下」

「捕まえたのか？」

「いや、それが」

「怖いわ、ガウディオ」

「ルノール嬢、ご心配には及びません。賊は必ず捕らえてみせましよう」

そう言って金髪の男　　ガウディオと呼ばれた男性は女性の甲を持ち上げて、そつと唇を寄せた。

「彼女を客間へ」

今度は銀髪の男が言った。

「早速だがパルティータ、そいつの特徴は？」

女性を見送ると厳しい表情に変わったガウディオ。

「女だ」

「女だと?!どれだけ手こずっている」

「侮るなよガウディオ。ネズミの様な女だ。黒い長い髪を靡かせ…」

「長い黒髪の女……………」

「どうした？」

「ダートを探せ」

うるたえ出したガウディオに、了解と答えた。

「もし、その女を見つけたら俺の前に連れて来い……………とにかく先ずはダートを見つけ出せ」

わたしは、茂みから耳を澄まして聞いていたつもりだが、二人の名前くらいしか確認出来なかった。

ふう……………やっと皆どこかへ行つたみたい。

腹這いになっていた身を起こし、立ち上がりスウェットに付着した草を払い落とした。

「逃げなきゃ」

逃げる……………？

どこへ？

「どこがどこなのかもわからないのに。」

頭に不安がよぎった。

まず、どっちやってどこだ？

ここは地球なの？

まるで違う世界…

そのまま呆然と立ち尽くしてしまった。

「やっぱりここに潜んでいたか」

銀髪の群青色の瞳が目を細め、わたしと対峙した。

「もう逃げられないぞ？観念しろ」

わたしの後ろに回り込み、両手を後ろでに捻られ拘束された。

「痛っ……っ」

「まさか、こんな小娘だったとはな」

顎をグイツと後ろから掴まれ無理やり上を見させる。

ニヤリと笑う銀髪の男が、勝ち誇った顔で真綾を見下ろしていた。

「気の強い女は嫌いじゃないが……もう少し従順さが欲しいな……」

そう呟きポンとわたしの背中を押して歩き始めた。

「ガウディオ陛下！ダート様を西の塔にて確認しましてお連れ致しました」

執務室に現れた衛兵を見てひょっこり顔をのぞかした長身痩躯の男を見た。

「二人にしてくれ」

「はっ！失礼しました」

「……何をした…ダート」

「一年半は案外早いものでしたねガウディオ陛下」

「お前…まさか…」

「これも陛下の為と…」

廊下がざわざわと騒がしくなってきた。

「ガウディオ陛下、失礼」

ダートは一礼し、扉を開けて廊下に出た。

「何の騒ぎだ？」

ダートは目の前を通り過ぎようとした一人の衛兵を捕まえて問う。

「ダート閣下。パーティータ大隊長が例の女を捕らえたいので
す」

白亜の螺旋階段を上って来る二つの影とざわめく周囲のギャラリ
ー達。

「やあダート閣下」

「パーティータ…それに…」

ダートは、パーティータから視線を外し少女を見やる。
俯いていた顔をゆっくり上げた少女。
目を見開いた。

「あつ…ああつ…！」

咄嗟に指を指すが、名前が出てこない。
確か二年前現れた青年だ。
向こうは覚えてくれてるだろうか。
今は彼が何よりの助けになる。

「真綾…さんでしたね？召喚は成功したと言うことか…ふむ。パル
ティータご苦労。後は任せてください」

「…ダート閣下はいつも俺のオイシイところを持って行くよな」

「なんとでも」

不敵に微笑んでダートは、真綾の腕を取った。

扉の向こうからざわめく中にパーティータと少女の声が微かなが
ら聞こえた。

懐かしい声

今、思い出しても恥ずかしいが真っ裸の俺を家に連れて行き保護

してくれた。

どうすれば良い?!

会って何と声をかければ?

たった二年で成人男性に姿を変えた俺を見て、真綾は何て思う?

あの時の少年だった俺だと言って信じてくれるだろうか?

執務室で、そわそわと動き回り扉を叩くノックの音がした。

ハッと扉を見つめる。

「……陛下……」

「入れ」

自分の声が震えた気がした。

「失礼します。……さあ真綾」

ゆっくり開く扉を凝視した。

現れたのは男の格好をした、はっきり言って身なりの良いとは言えない少女。

しかし、記憶にある真綾その人だった。

艶のある黒くて長い髪。

ダートとは、また違った黒。

鼻筋の通った小さな顔。

ふっくらと瑞々しく熟れた唇。

きりりとした大きな二重の瞳。

格好がアレでも、真綾の存在感に圧倒される。

「真綾…彼が、二年前の少年ですよ。憶えていますか」

「えっ…?!」

じつくりと真綾はガウディオを見た。

「さあ…もっと近くに」

背中をダートに押され、一歩ずつガウディオに近づいて行く。

「あの時の…生意気少年？」

立派に青年の姿に変わってしまったあの生意気少年。

不揃いに短く切りそろえられた金の髪。がっしりとした逞しい肩。衣服の上からでもわかる隆起した胸板。

碧眼は澄んだ色で、わたしを見つめる。

随分背が高くなり、見上げなければならぬ。

ざっと百八センチ以上はあるだろう。

鼓動が早くなるのがわかった。

「……ダート…彼女に服を…いつまでもみすばらしい格好などさせるな」

冷たくそう言い放った。

みっ…みすばらしいですってえ…!!

そのガウディオの言葉に、こめかみがピクつく。

「部屋は如何致しまよう？」

ダートにそう問われ金の装飾を施された木製の机の前に立っていたガウディオは振り返った。

「鳳の間の横部屋を使用してくれ」

「鳳の…？」

自分の耳を疑ってしまった。

いや、自分はそれを望んでいたが…

まさか、もう決めたのか？

「侍女達に準備をさせましょう。さあ真綾、行きますよ」

「えっ…はあ…」

真綾は雰囲気にも圧倒し、情けない返事になってしまった。そんな真綾の手をダートは強く引っ張った。

「それではガウディオ陛下、失礼します」

一礼をし、退出しようとした。

「ダート…真綾に必要最低限触れるな」

瞬間

ダートは、わたしの手首をパツと離れた。

「はいはい陛下」

ダートは笑いをこらえるのを噛み締めて、そう告げた。

豪華な扉を幾度もくぐり抜け天蓋付きの大きなベッドの横を通り過ぎ、部屋の隅にあるこじんまりした扉を開けたダート。

「ここが貴女の部屋です」

「部屋って…わたし家に帰りたいんだけど」

家、空きっぱなしだし…誰も居ない。
泥棒にでも入られたら…

それに学校もある。
って言うか、受験生なんですけどー！！

「小旅行だと思えばいいです。それに一度ここに来たら次戻するには時間が必要なんですよ」

「時間ってどれくらいなの？」

「そうですねえ…ざっと半年…一年…まあそんなところです」

間に合わない。

顔面から血の気が引くのがわかる。

「そんな！！困ります！」

「ガウディオ陛下の望みを叶えると思って辛抱してもらえないだろうか？不自由な思いはさせない」

「ガウディオの望み？」

真綾は軽く小首を傾けた。

「父上、それに母上」

城の中庭から行ける母屋へ向かった。
両親がここで隠居生活を送っているのだ。

「あらあらガウディオ、どうしたの？何だか嬉しそうね」

「ガウディオじゃないか、珍しいな」

庭先のテラスでチェスを楽しむ両親の前に立つ。

「彼女が…真綾が来ました」

「何?! 本当かガウディオ?」

「まあ! ガウディオ…さすが私の息子ね」

チエスを片付け始める両親を見て、戸惑う。

「早速、ガウディオが見初めた女性を見に行かなくてはね」

「そうだな。ルノール嬢の事もある」

「まさか、今から城に?」

「「勿論」」

夫婦揃って声を重ねて答えた。

「……(絶対楽しんでやる…!!)」

「んっ……あっ……んんっ」

「ダート閣下も手伝って下さいまし! ふんっ…!!」

部屋の隅で腕を組み真綾が侍女達にめかし込まれている様子を見るダート。

「ガウディオ陛下直々に真綾様に触れるなど言われていますからね」

「んっ…く…苦しい…」

「もう少しコルセットは緩めた方がいいわね。慣れていないみたいですよ」

恰幅の良い年配の侍女は、紐を少し緩めてくれた。

それから、薄紅色の胸元が大きく開いたドレスを着させられ、いかにも高価そうな宝飾品を身に付けた。

首に巻かれた黒色のチョーカーは、ダイヤモンドが光っていた。

『ガウディオの望み？』

陛下は、貴女に惚れています。

しかし陛下は、このままだとルノール嬢と結婚してしまう。何とかして阻止したいのです。

そう言ったダートの灰色の瞳は真剣で…

「なーんて素敵なんでしょう?! 最初着ていた衣服には正直驚かされましたが…磨けば光るダイヤモンドですね」

鏡台の前に立ち、背後から年配の侍女　　マードは、うっとりしながら微笑んだ。

「そう思いませんか？ダート閣下」

「…確かに…」

男にとっては目の毒だな。

黒髪を高く結いお団子にし、薔薇の飾りで纏めた後ろ姿。白い頂に、黒色のチョーカーが映える。

二年前は、まだあどけない少女だったが…

二年経つと、ここまで女性らしくなるのか？

そんな思いにふけていたダートは室外に人の気配を感じて視線を向けた。

すると控えめなノックが室内に響いた。

「入るぞ」

声の主は、ガウディオだった。

そして扉が開き入って来たのは、ガウディオと壮年の男性と女性。

「…真綾…」

「ガウディオ陛下…それに…」

「マーダは、深々とお辞儀した。
ダートも深く一礼した。」

「マーダ侍女長…良いのですよ。私達は隠居した身。ただのマーガレットなのよ」

優しい眼差しをマーダに向け三十代後半の女性。
その視線が、わたしの方へと移った。

「なっ なっ なっ ……」

わなわなと震え始めたマーガレット。
皆は、マーガレット異変に注目する。

「どうしたのだマーガレット？」

夫のダイアンは妻の肩を掴む。

「なっ…なっ…なんて愛らしいのでしょうか…!!あの腹黒いルノアールとは大違いよ」

すかさず、真綾の傍に寄ると頬摺りする始末。

「はっ…母上？」

どうすれば良いのかガウディオは困っていた。
真綾に成人の儀について話すつもりでいた。
そして生涯の伴侶として共に生きていく事を告げる気でいた。
それが、今 自分の母親によって妨害されている。

「貴女の事が、もっと知りたいわ。私の母屋へ招待するわ」

「うむ、それは良いアイデアだ」

「ダイアンもそう思ってた？それでは行きましょつか」

「マーガレット様、美味しい紅茶をお淹れしましょう」

真綾は、マーガレットとダイアンに片方ずつ腕を引っ張られる形
でずるずると連れて行かれ…その後をマーダが追った。

「ガウディオ陛下…」

「何だい？ダート閣下」

成人の儀を伝えぬまま、真綾は母上達に連れて行かれてしまっ
た。

いや…しかし出だしは良好じゃないか。

ルノアールを母上に紹介した時は、険悪だったが真綾となら母上
は上手くやっていける？

それだけでも、俺にとっては大きな収穫になった。

連れて来られたのは、中央庭園を抜けた先の建物。

「お疲れ様です真綾様」

鳳の間に帰って来た時には既に陽が完全に沈みきっていた。疲れ切っていた真綾はマーダの後ろをのろろついて歩いた。一際豪華な扉の前で立ち止まったマーダは手をかけて開けた。そこには部屋の中には仁王立ちしたガウディオの姿があった。

「ガウディオ」

「真綾に話がある。マーダ外してくれないか」

「はい。畏まりました」

ボタンと音を立てて扉は閉まった。

「真綾……」

苦しそくに顔を歪めたガウディオは、真綾の傍に近づいた。

「忘れようと思った。お前と俺は住む世界が違うから」

「…え…」

わたしの両手を掴み、それをガウディオは自分の額にくっつけている。

指先にかかるガウディオの金の髪と手首に吹き付けられる吐息がくすぐりたい。

「一目惚れなんだ。駄目だとわかっている。ここは真綾の世界と

は違つから」

「わ…わたしの中では、まだガウディオは生意気少年のままだから…」

急にそんな事を言われても。続きの言葉は紡ぐ前に飲み込んだ。

「ちゃんと俺を見てくれ。昔の俺じゃなく、今の俺を」

「ガウディオっ…痛いッ」

掴む手に力がこもり、離してほしいと訴えかける真綾の瞳。

ああ…どうして真綾は、わかってくれない？！

もどかしさと伝わらない想いに苛立ちを覚えた俺は真綾の顎を掴んだ。

「なっ…んん…」

真綾の震える唇に、自分のそれを重ねた。

「んーッんー!!」

真綾は、空いた手で俺の胸を何度となく叩く。

最初は啄む程度のもりだったが、いつの間にか真綾を屈服させる勢いで荒々しく角度を変えて彼女の唇を貪った。

息つく間もなく、彼女から唇を離れたとき酸素を取り入れる為に

息を吸い込んでいた。

「真綾……」

興奮に頬を火照らせて潤んだ瞳で見上げてくる真綾に、否応無しに体中の血液が中心部分へと集中する。

「どうしたら真綾に受け入れてもらえる？」

「どうするもこうするも……」

わたしは、何て答えたらいい？
わからない。

はい。って言ったら一生ここでの生活になりそうで怖かった。

「真綾は、俺と同じ気持ちなのか？」

まだ自分の気持ちに整理がつかない。
それなのに……くっ……何よその眼差し……
小動物みたいに潤んだ瞳で、わたしを見ないで！

……

……

ああもう……！

「……わかった。わたしも……ガウディオと同じ気持ち……」

「…真綾…!!」

がっしりと…わたしの両手を握りしめ、額にキスをする。
そして、あの痣が付いている方の手を取り、再び上から口付けをした。

たちまち痣は消え失せてしまった。

「何をしたの？」

「解除した。もう俺が居るから必要ない」

「何が?!」

「この痣は、真綾の純潔を守る為に付けた。へんなムシが付かないように」

そう言っただウディオは、悪びれた様子もなくそう言った。
今までの出来事が走馬灯のように駆け巡る。

これで納得がいく。

わたしに近づく異性は、あの痣の力で寄せ付けないようにし、且つ二度と近づいて来ない為に危害を加えていたと言っわけか…

「もし、真綾の純潔が散らされていたら」

「散らされていたら？」

「痣は消滅する」

再び手首を持ち、今は消えてしまったが痣があった場所を撫でる。

「これは、普通皇族に目をつけられた女性に付けるもの。他の男に取られないよう。そして確実に自分の子供を産んでくれるかどうか一目でわかる。だから、昔は何人も女性達にこの痣を付けるそう。その内の半分以上は見定め期間中に純潔を散らしてしまうみたいだ」

純潔でない者に皇族の子供を孕ますわけにはいかない。

「どこの男の子供かわからないだろう？
と言い加えた。」

「じゃあ、わたしが純潔じゃなかったら？ガウディオは…」

「きっと迎え入れていない。だろうが、それでも俺は真綾じゃなければ嫌だ。真綾が側に居てくれたら何も要らない」

彼は遊びで言ってるんじゃない。真剣なんだ。

わたし、これで本当に良かったのだろうか。

言っただけがいいが未だに心は迷っている。

でも今更、そんな事言えない。

言えるわけない。

さっきよりご機嫌なガウディオを見ると…

本当に、わたしを好いてくれている？

けど、それはまだ

わたしが純潔だから？

でも関係ないと言ってくれている。

「真綾… ついて来てくれ」

「わっ… ちょっ…！」

腰を逞しい腕がかっさらう様にグイグイ引つ張り廊下へと出た。何度も角を曲がったり部屋に入ったり複雑に連れて回るガウデオ。

兵士や衛兵… 侍女達らしい人々は、面白いものを見るみたいに微笑んでいた。

「ガウデオ… あんたどこに向かっているの？」

「ダートの私室」

それだけ言うと、会話は遮断されてしまった。ダートの所になんか行って、どうするんだろ。連れて来られたのは城の側面に建つ塔だった。

「ここにダートが？」

「そうだ」

少し強張つ顎のライン。

何を緊張しているのだろうか？

鉄の扉を開けてガウデオは、わたしの手をギュッと握りしめ薄暗い塔の中に足を一歩踏み出した。

石造りの狭い螺旋階段を上り続け

所々にある穴が空いたただけの窓から外を眺める。

だいぶ高い所まで上ったみたい。

足を止めようにも引つ張られているので、ゆっくり景色を見ていられない。

やっと踊場に着いたみたいでガウディオは、木製の古めかしい扉を叩いた。

「ガウディオ陛下：毎回言いますが、いい加減壊さないで下さいよ」

ひよっこり隙間から顔を出したダートは、ガウディオの後ろに居るわたしを見つけて目を細めた。

「ご決心が着いたのでですね？」

「ああ…だからあの痣も消した」

「そうですね…ではこちらに」

そうダートに促されわたし達は、室内に入った。

室内は、外観から想像出来ないくらい広かった。

そして、床も壁も石造りではなく暖かみのある木造になっていた。

「驚きました？」

少し得意げなダートは隅にある黒色の扉のノブを持った。

「イメージと違う…それに、こんな広いものなの？」

「ほとんどは、幻想魔術を使っているからね。真綾様が見ている世界は全て本物だとは思わないでいただきたい」

現に…

ダートはノブを引つ張り黒い扉を開けた。

一瞬、強い風が吹き抜けた感覚がしたが…髪は乱れていない。

「ここから先は、実際に存在しない部屋です。時が止まるので少々気分が悪くなると思いますが…」

「行くぞ」

ガウディオは、わたしの手を絡めるとゆっくり足を踏み出した。少し進んでから扉が閉められた。

空間が静寂に満ちて扉の音が入を聞き取った。

パツと振り返った真綾は最後に入ってきて来ているのだとばかり思っていたダートの姿がなかったことに不安を感じた。

「ガウディオ…!」

「怖いか？」

怖い

真っ暗闇で

ガウディオさえわからない。

ただ手を握られ体温を感じるだけだ。

「確かこの辺りだったはず…」

「わかるの？」

「ああ…これは成人の儀で俺たちの婚約を成立させる意味も含まれている。何度もここに来て練習したからな」

ピタツと止まり、急に屈むガウディオ。

ズルズルと石と石が擦れ合う音が聞こえたと思ったら蒼い光が、ガウディオとわたしの周囲を包んだ。

やっとガウディオの顔が見えた。

「真綾…屈んで」

ガウディオに言われるがまま屈み、彼の指す足元を見た。

石の蓋をしていたそれは、蒼く輝く小さな小さな泉のようなもので…

「綺麗…」

「痛いが我慢してくれ」

えっと声を出す前に素早く小刀を取り出したガウディオは、わたしの人差し指を小刀で軽く突いた。

浅く切れた皮膚からは、赤い玉になった血液が滲み出てきた。信じられない思いで様子をうかがっていると、今度はガウディオ自身が指先を切っていた。

そして、お互い滲み出る指先をくっつけて泉の中に手を入れた。流れる血液は、水中で二つの円を作り上げた。泉から手を引き上げると、傷は塞がり痛みも血もなかった。

「…出来た…」

ガウディオは泉を見つめて微笑んだ。

「なにになに？」

わたしも興味が湧き一緒になって覗き込んだ。

水底に沈む二つの銀色に輝く指輪。

ガウディオは、嬉しそうに指輪を掴むと真綾に見せた。

「プラチナね…でも…どうして」

「錬金術だ」

「あの…石を金に変えてしまう？」

「そう。今回は血を白金に変えた。開発したのはダートだけだな」

ガウディオは、ズルズルと再び石蓋で泉を閉めた。

「ダートって見かけ以上にスゴい人だったのね…!!」

「そうだな。色んな意味でスゴいぞダートは…それから…この泉の存在は、俺の両親、ダート…それから真綾しか知らない」

誰にもこの泉の事を話してはいけないからな。

ガウディオに強く念を押され真綾は頷いた。

「お帰りなさい」

眩しい世界に戻ってきて扉から出るとダートはいつもの食えない微笑みで、真綾とガウディオを見つめた。

ダートが言っていた通り、時刻は変わっていないかった。

確かにあの暗闇の空間には時間という概念はない。

「その表情だと成功したようですね」

「ああ…上手くいった」

さつき薬指に詰められたプラチナのシンプルな指輪をダートに見せつけるように、ガウディオは高々と掲げて互いの手を絡ませてみせた。

「きつとお喜びになられる」

「ああ…！だが今日はもう疲れたから明日報告に行く。見届け役、ご苦労」

ダートは軽く礼をし、わたし達を促し上って来た塔を今度は下り始めた。

薬指に嵌った銀に輝く冷たい指輪に触れた。

「…実感がない」

「…無理ないだろう。突然、わけのわからない世界に来たんだ」

前を歩くガウディオは振り向いた。

「だが…俺には真綾しか居ないと思っている。他の連中とは違い媚びへつらうわけでもない、そんな真綾がどうしようもなく愛おしい」

そう、この感情は

真綾にだけしか働かない。

真摯な碧い眼差しに、頭がクラクラしそうになる。

こんな事を言われると心が締め付けられる。

「わっ…わたしは…」

真綾の言葉の続きを聞く前にガウディオは遮った。

「俺たちは婚約したんだ。真綾が、俺とは違う感情を持っていたとしても…真綾は俺のものだ」

吐き捨てるように、そう言つと再び前方を向き、階段を下り始めた。

「…ガウディオ…っ」

口から漏れた声は、ガウディオには届かなかった。

彼を傷つけてしまった。

この胸が締め付けられるような痛みがなんなのか、心がモヤモヤした。

その燻ぶつた感情をもつた真綾は随分先を歩くガウディオの後を追った。

鳳の間に戻つて来るとガウディオはマーダを呼んだ。

「マーダ…真綾に湯浴みを」

「はい。陛下。ささつ真綾様、こちらへ」

マーダに手を引かれ鳳の間から出て廊下に出た。

「浴場の間へご案内致しますわ」

「……………ねえマード」

「何で御座いましょう真綾様？」

「ガウディオの事なんだけど」

「まあ！陛下に関心を持つ事は素晴らしい事ですわ」

「関心って言うか、気になって…ガウディオとの出会いは二年前な
んだけど、その時はガウディオ六歳くらいだったんだよね」

でも今は、立派な大人じゃない？わたしなんかより。と肩をすく
めて言ってみた。

「そんな事を気にしていたのですか？」

「そんな事じゃない！頭と心がついていけないのマード！」

ガウディオに、好きだとお前しかいらぬ。と告白されても
わたしの中でのガウディオは、あの生意気少年のままです…

「真綾様、外見は確かに大人の男性へと成長されましたよ、それは
彼ら皇族の血筋が影響しているのです」

「血筋…」

「巨人族なのですよ。彼らは生まれて五年で成人して、それからゆ
っくり年をとっていくのです」

浴場の扉を開けて、真綾を中に招き入れる。

「だから」隠居されていますが、両陛下は今でも若々しいのですよ」
ドレスの細かなボタンを手早く外し、バサリと大理石の床に落ちる。

「マード」

「外見は確かに変わりました。それは誰もが認めます。だって成長しているんですもの。真綾様自身も、きっと陛下から見れば変わったと思いにいられているはず。けれどガウディオ陛下の優しさ厳しさは、お変わりないでしょう?」

コルセットの紐を緩め、強張っていた体がスツと軽くなる。

「真綾様の頭の中は陛下の事で一杯ですね。もう真綾様の心は気づいているのでは?」

「……マード」

「そう!その笑顔ですよ真綾様」

マードは残りの下着を剥ぎ取ると湯船の張った浴槽に、わたしを入れて泡立てたタオルで体を洗い出した。

他人に、そんな事をされたことがなかったから、緊張はしたもののマッサージをされているみたい。

緊張がほぐれたわたしはそのまま意識を手放した。

ふわふわと宙に浮いた感覚に朦朧としていた意識が徐々に覚醒し

ていく。

暖かい体温に、無意識のうちに頬をよせていた。その途端に、わたしのものではない心臓の音が耳に響く。早鐘を打つ、その音に何故だか安らぎを覚えた。

柔らかいベッドの上に寝かされたのだろうか体が沈みイヤでも目が覚めた。

仰向けの状態で黒い影が、わたしの体を覆い見下ろす。

「…ガウディオ…？」

「……」

わたしの呼びかけには答えず近づいてくる彼の顔にわたしは堅く目を瞑り背けた。

それでもガウディオは指先で、わたしの顎を掴み自分の方へと向けて、ゆっくり唇を重ねてきた。

下唇を吸うように舐め、そして甘く噛んだ。

「んっ…」

初めての感覚に鳥肌が立つ。

それは嫌悪感からくるものではないと、わかっている。

唇の端から徐々に侵蝕していくかの様に、ガウディオは荒々しい口づけをしてくる。

わたしは慣れない事をされ、必死にガウディオにしがみつき振り落とされないように拙くとも必死に応えた。

長い長い口づけから解放された時には、綺麗にメイキングされたベッドのシートには皺がより唾液で所々に染みを作っていた。

互いに頬を紅潮させ、荒く息を吐くガウディオは血走った目つきで、わたしを捕らえて離さない。

「今日、俺たちは婚約したんだ」

自分に言い聞かせているかのように呟いた。

「真綾……」

苦しそうに顔を歪めて、真綾に近づくとガウディオは再び先程とは違う、優しい口づけを落として真綾の首筋に顔をうずめた。

何回も起こるチクリとした痛みは顔に顔を歪めながらも、今から起こる事に、不安と期待が心の中を駆け巡る。

「っ！駄目だ！」

ガウディオはそう自分に言い聞かせる様に大きな声で一言発した。それから素早く真綾の上から離れた。

深い闇が訪れた頃、窓際に佇むダートと…

「信じられません！！いいえ！信じたくもありません！」

豪華な客間に響く泣き声に混じった怒声。

取り乱した様子で、座るカウチを何度も拳で叩きつけた。

「お止めくださいルノアール嬢…」

腕を組み振り向いた先には取り乱した一人の貴族令嬢。

「だってだって！！あともう少しでしたのよ？！それを突然降って湧いた何処その女のせいでガウディオ様は…」

キツと涙に濡れた瞳を向けられダートは、肩をすくめてみせた。

「あつアナタ！私をバカにしているのですかっ?!」

「いいえ。昔の知り合いに良く似ていましたねえ…つい可笑しくて」

プツと口許を押さえて笑った。そのダートの態度に対して、顔を真っ赤にし膨れ面になった。

「貴方がガウディオ様の近衛兼賢者でなければ…」

グイツとカウチに近づいたダートは、笑いを噛み殺して聞いた。

「…近衛兼賢者でなければ？」

「……ふんっ！」

ルノアールはプイッとダートとは逆の方を向いた。

「ま・ガウディオ陛下とルノアール嬢が仮にも婚約の儀に、漕ぎ着けたとしても…」

チラリとルノアールを見るダート。

「なっ…何か言いたげですわね」

「おや？…強気ですねえ。ルノアール嬢、貴女は隠し事をしているのでは…？純潔じゃないと言う秘密を」

「…！」

「貴女が、ガウディオ陛下に婚約者第一候補として此処へ来た時、陛下から直々に言われたはず…婚約の条件は、純潔である事」

ゴクリと、ルノアールの喉から音がした。

「今時、処女を守っている子女なんて居ないわ！」

突然開き直りに入り、ダートはヤレヤレと首を横に振った。

「まあ…そう言う考え方があっても構いません。時代の流れですから。しかし、陛下は絶対的に自身の子孫を残さなければなりません」

それが、この帝国の式たり。

一度他者と交わった体には、抱いた者の遺伝子が少なからず残ってしまふ。と考えられている。

それを避ける為に、誰とも交わったことのない娘を選ぶ。

「結婚されて、陛下の子か…それとも、貴女の義兄上の子かわからなくて争うなんて御免ですからねえ」

何度目かの溜め息と共に紡ぎ出したダートの言葉に、ルノアールは顔を青ざめて口許に両手を当てて肩を震わせた。

「…！」

「深くは追及しません。貴女は陛下と婚約しなかったのですから」

「…っ…お願い…！この事は誰にも言わないで」

鮮やかな群青色の瞳を潤ませてダートの足元に縋りつくルノアールを、ダートは細めた灰色の瞳で見つめた。

「…良いですよ？その代わり条件があります」

につこりと微笑むダートは、ルノアールを見下ろした。

その冷たい視線に、ゾクリと背筋に冷たいモノが走った。

「条件つて…」

華奢な体を抱き締めてブルリと震えた。

「ある物を探していただきたいんですよ」

「……ある……物？」

少し落ち着きを取り戻し始めたルノアールに、ダートは話を切り出した。

「この帝国には……何か重大な秘密がある。何百年以上も戦争に勝ち続け、貿易、商業においても勝っている」

「……」

「ずっとこの帝国に仕えていた。ない筈がない」

カウチで腕を組み、目を瞑ったルノアールは、深い溜め息を零した。

「錬金術、ルノアール嬢は、耳にしたことがあるのでは？」

「……ええ……この城のどこかに錬金釜があると……」

そのルノアールから紡ぎ出された一言に、ダートの視線は鋭くなつた。

「それをどこで？」

「お兄様から……まさか陛下に忠誠を誓ったダート閣下までも目的が同じだったなんて」

「……そうみたいですなぁ」

顎のラインを擦りながら、ダートはルノアールの表情を見つめた。

「話が早いわ。貴方どれくらいご存知なの？情報を提供して下さいな」

一気に血走った目つきに変わり、ルノアールは長年帝国に仕えるダートには、自分たちの知らない事を教えてくれると思ったのだらう。

さつきとは、まるで別人になっている。

「待ちたまえ。ルノアール嬢、貴女は勘違いしている。優位な立場なのは、こちらの方でしょう？」

「たつ…確かに。けれど私には時間がないのです。ガウデイオ陛下と婚約の儀にこぎ着けなかった…国に帰らなければならぬ時期なのです」

「それは、貴女の勝手です。もし鍊金釜を見つける事が出来たとしたら？」

どうするつもりなのですか？

と、続ける前にルノアールは言った。

「私の国は世襲制ではありません」

「そうですね。ルノアール嬢の母国、ポルトリオは世襲制ではない…」

「…だから私たちの手で建て直すのよ。鍊金術で、この帝国の様に」

小国のポルトリオ。

昔は、緑と湖で輝きに満ちた国だった。

小国ながらもぼそぼそと皆が暮らしていた。

帝国と、武装国家バルンディアに挟まれたポルトリオは、戦争の植民地にされ戦争が終わった今でも、傷痕は深く。

破壊しつくされた建物、森林。涸れた湖。

復旧の目処が立たない状態だ。

感慨深くなつて、目を再び閉じたルノアールを横目に、ダートはクツクツと喉で笑った。

「?!」

「まさか、こんな簡単に君たち兄妹の企みを教えてもらえるなんてねえ」

「あつ…!!まさか図ったわね!!」

驚愕に顔が真っ青になつていく。

「俺を誰だと思ってるんだ?何百年とこの帝国に仕えて来た賢者様だぜ?」

「あ…う…」

「陛下を、この帝国を裏切るワケないじゃないですか。少々興奮気味だった貴女を誘導していくなんて他愛もない」

至極満面の笑みで告げるダートの表情は、酷く恐ろしいものであった。

カウチから立ち上がっていたルノアールは、毛先の長い絨毯の上に崩れ落ちた。

その彼女に近づいたダートは、うなだれたストレートの銀髪を撫でて言った。

「貴女の国の事に関しては、帝国に非があります。陛下に復興支援を提示してみます。最初から存在しうる物かわからない物を当てにせず、陛下に取り合ってみたら良いものを…」

うなだれた彼女の表情は、見えなかったが絨毯の染みが一際濃くなった。

嗚咽を零すルノアールは、コクリと頷いた。

翌朝目が覚めると、当然だがガウディオの姿はなかった。

昨夜、ガウディオは苦渋の表情でわたしの体から身を引いて部屋から出て行ってしまった。

それから眠たい目を擦りながらガウディオが戻ってくるのを待ったが、何時の間にか眠ってしまったようだ。

ベッド脇のテーブルに銀のトレーに乗った朝食が置かれていた。それを見つけたのと同時に室内にノックの音が響いた。

「陛下？ダートです」

ノックの後に発せられた声に、真綾は扉に近づいて開けた。

「…おはようダート」

「…おはようございます。おや？陛下は…」

ダートは思案しながら、ああ。と自己完結に至った。

「…ダート？ガウディオ知ってるの？」

そう真綾が聞いたとき、隣の浴室扉が大きな音をたてて開け放たれた。

そこには、水に濡れた髪をタオルで拭いながら出てきたガウディオだった。

これに対して驚くこともなく神妙な面持ちで、ダートはガウディオに近づき耳打ちした。

割と大切な内容の話でもダートは、わたしが居ようが居まいがお構いなしにガウディオに進言していた。

耳打ちしているなんて初めて見るかもしれない。

「そうか…しかしどこから仕入れたのか気になるな…」

「パーティータは腕は確かですが見ての通りの放蕩者」

「なかなか捕まらないだろうな」

「いえ：舞踏会を開きましょう。そうなれば警備で忙しくなりますし持ち場があります」

「ナルホド。その時に問い質せばいいのだな？」

しかし

ここでガウディオは、少し困った顔をしてダートを見た。

「何か問題でも？」

「いや。：何の為の舞踏会なんだろうかと：行事シーズンでもない」

いきなり舞踏会を開催だなんて不審がられる。とガウディオは、ぼそりと呟くように言い放った。

「そうでもないですよ陛下。ルノアール嬢を思い出して下さい」

その名前に、わたしはガウディオに気づかれないように彼を盗み見た。

いつものポーカーフェイスに、わたしは何とも言い表せない感情に胸が苦しくなった。

このポーカーフェイスの下では、どんな表情をしているのだろうか。びっくりしているのだろうか。

照れているのだろうか。

それとも怒っているのだろうか。わからない。

「ああ…覚えてるよ。ふうーん…その手があったか」

「手配は…」

「全部ダートに任せる」

「では明後日にでも」

ダートは、そう言うとき軽くお辞儀をして部屋から出て行った。

パタンと静かに響いた扉の閉まる音を合図に、ガウディオは真綾に言う。

「そう言う事だ真綾」

「は？…あの〜舞踏会しかわかんなかったんですけど」

「それだけわかっていたら十分だ」

意地悪くほくそ笑んだガウディオは、仕事が滞っていると行って部屋から出て行った。

中央庭園。

草影から覗く金色の髪。

芝生に混じり、ゆらゆらと風に乗る。

「パーティータ大隊長、こちらにいらしたんですね。捜しましたよー」

パーティータと呼ばれた男の部下が息を切らせながら芝生の上で寝転ぶ上司へ言った。

パーティータは、気怠げに片目を開けて見やる。

「どうした？息なんか切らして…」

「来ましたよ来ましたよー」

「はしゃぐな、やかましい」

そう言われて青年は、敬礼をしてから芝生の上で正座をした。

「今、ダート閣下から知らせがあったんですが、パーティーが開催されるみたいなんです」

「またクソかつたるい……あれ？行事シーズンじゃねえよな？」

寝転がっていたパーティータは上半身を起こして、横で律儀に正座している青年を見た。

「あゝ何でもルノール嬢、帰国するみたいで…その為のパーティーみたいですよ」

「…ふうん…ルノールの…」

そうぼそりと呟き立ち上がった。

着衣に付いた草を払い落として、軽く伸びをした。

「あれ？どちらへ？今から配備ミーティングがって、ダート閣下が……」

青年の声を無視してヒラヒラと手を振った。

「どこでもいい。お前に任せる」

「ええッ！！イヤですよ！プレッシャーに弱いつてご存知でしょう？！」

庭園に残された青年は、肩を落とし佇む他なかった。

その頃、先程まで庭園に居たパルティータは、顔を青ざめて城内の客間へ続く回廊を足早に歩いていた。

ルノアールの為のパーティーだと？

確かあいつは、ガウディオとの婚約に失敗したはず。

なのに、パーティー？

何のパーティーだ？

考えに耽って歩いていると、向こうから来たダートにパルティータは気づかずにぶつかってしまった。

「おや？パルティータ大隊長じゃないですか。どちらへ？今からミーティングですよ」

飄々と問い詰めるダートを尻目に、パルティータは愛想笑いを浮

かべて言った。

「ああダート閣下、その件については部下に頼んでいる」

俺、急いでるんで。と一言付け足して、通り過ぎた時。

「何故、従兄だと嘘を吐くんです？本当のご兄妹だというのに」

背後から投げかけられた言葉の内容を理解するのに、少し時間がかかった。

「……」

「錬金釜。この情報は、どこから入手したのですか？」

「何の事だか……」

「とぼけても無駄ですよ？ルノール嬢は認めましたからね」

「っ……」

苦い顔をして対面するダートを睨みつける。
それから、小さく舌打ちをし両手を上げた。

「降参だよダート……閣下」

「帝国機密の情報は、どこから漏れたのか」

パーティータは、大きく溜め息を零して話した。

「情報は、…聞いて驚かないでくれよ」

ニヤリと微笑んだ。

シンと静寂の漂う回廊。

「俺も、聞きたくて聞いたわけじゃない。たまたまあの場所に居合わせて…」

何時もの様に、職務ほっぽりだして昼寝をしていた。

俺のお気に入りの中で。

さっきまで居た中央庭園だ。

前陛下の屋敷が建つ敷地内にあるために、俺が寝ている所まで散歩していたんだろくな。

…来たんだよ。

別に聞き耳立てて聞いていたわけじゃないんだよな。

仲の良い夫婦だなんて。

単純に、そんな事考えてたんだよ。

そしたら…

錬金術の話が聞こえて。

「どうやらガウディオのやつ一目惚れらしい」

「水晶球を見せてくれないのよ」

拗ねたようにマーガレットは、唇を尖らせた。

ダイアンは、そんな妻を愛おしく肩を抱いてみせた。

「成人の儀と婚儀を一緒にする。だなんて前代未聞よ」

「それだけ、その子に惚れているんだろっ」

「だからって今から、あの異空間での練習だなんて無謀よ！」

「ダートが付いているじゃないか」

「……………そうよね。彼が居れば大丈夫よね」

「私も、あの錬金釜には最初驚いたものだよ」

「ええ…私もよ。嫁いで来て錬金術を目の当たりにするなんてね。まあ一番驚いたのはダートなのだけれどね。あの釜を作ったんでしょっ」

「そっらしい」

「彼は、帝国の遺産ね」

俺は、いつの間にか話にのめり込む程に聞いていて、驚きの声を出さないようにと、無意識のうちに手で口元を覆っていた。

錬金術

錬金釜

帝国の遺産

俺は、錬金釜を手に入れる事で小国と呼ばれる祖国ポルトリオを救えると思った。

「錬金術といい帝国の遺産といい、あんた一体何モンなんだ？」

周囲の空気が張り詰めた気がした。
ピンと張った空気。

もうこちらから問い詰める事の出来ないような。
そんな雰囲気。

「帝国の遺産…そのまんまですよ」

「あんた、まさか」

「生きていたダートが帝国の為に遺した記憶の塊」

ダートは、顎でクイツとパーティータの腰に携えてある剣を示した。

「刺してみなさい。死ぬことはありませんから。これが大昔に賢者と崇められてきたダートの力ですよ」

にっこり微笑むダートは、不思議と恐ろしさを感じなかった。
偉大過ぎて、そのような感情など吹き飛んでいた。

「…ルノアール嬢にも伝えてありますが、ポルトリオの件に関しては帝国に非があります。陛下には復興支援の手配は済んでいます」

俺は、抱えてきた重荷から解放されたかのように、膝の震えが止まらなかった。

気づいた時には冷たい回廊にへたり込んでいた。火照っていたのだろうか。

ひんやりと冷たい回廊に、俺は安堵感を覚えた。

「パーティータ、もう一度聞く」

上からかけられた声に、ハッと顔を向ける。

「ミーティング、行くか？」

「あっ…はい」

鳳の間

「ガウディオ見てコレ」

露出度低めのドレスの両裾を持ち上げて今、履いているヒールを見せた。

「それは…」

「見覚えある？マーガレットさんのを貰ったんだよ」

帝国の紋章をヒールの表面に輝く宝石を散りばめてかたどった高級品。

マーガレットのお気に入りの一つだったと記憶している。

「よくそれを母上が手放したものだ」

信じられないと言った表情でガウディオは、マジマジとヒールを見ていた。

「ねえガウディオ。パーティーってどれくらいの規模なの？」

「ん？…ああ…そうだな…全ての手配はダートに任せっきりだから…」

「任せっきりだから？」

「わからん」

その言葉に、がっくりと肩を落とした。

「もうそろそろ時間だろう。一応ルノアール嬢は、帰国するって事だから大広間に入る時は、エスコートしないとイケない」

「ん。わかった！！楽しんでくるね！」

「おい。ちょっと待て！」

グイツと腰を両手で捉えられて、顔だけガウディオに向ける。

「何？」

「髪飾り…」

「不思議な形…藤の花？」

桃色に色づき葡萄の房のように、一つずつが小さな蕾になってい
る花。

それが、束になり綺麗な髪飾りとなっている。

「木五倍子きぶしって言って木に咲く花なんだ。珍しいだろ」

「かわいい…ありがとうガウディオ」

生花なのが勿体無いと思ってしまう。

「くれぐれも、ダートから離れないでくれよ」

「えっ？」

「はい。陛下、任せて下さい」

どこからともなく現れたダートに、びっくりと身を竦めた真綾。
わたしは、ダートを見上げて軽く会釈をした。

「えっと…宜しく願います」

「こちらこそ。貴女をエスコートできるなんて光栄です。害虫から守ってみせますよ陛下」

「じゃあ俺はルノアール嬢を迎えにでも行きましようか」

鳳の間から出てガウディオは、わたし達とは逆の方へと向かった。
ルノアール嬢のいる客間に。

わたしは、ダートと共に大広間へと向かった。

大広間へ向かう途中の受付ホールには、貴族達が一時の休息をしていた。
たくさん的人数でホールは、ごった返しになっていた。

わたしは、ダートに腕を引かれて人波を掻き分けて、やっとの事で大広間へとたどり着いた。

学校の体育館10個以上は、あるであろう広さ。天井も高く、シヤンデリアが大きいサイズを中心に、花びらのように弧を描き広がっていく。

「綺麗…目がチカチカする」

笑いながら、横に立つダートを見やると、険しい表情になっていた。

「ダート？」

問いかけた瞬間…

パーティー会場

大広間で女性の悲鳴が、起こった。

そして、連鎖反応が起きたと言わんばかりに、周囲の女性達からも次々に悲鳴が沸き起こった

がやがやとざわめきが起こり、出口へと逃げ出し始める人々。ギョツと、わたしを掴むダートの手が強くなった。

何かが、殺気だった何かがこちらに向かって来るのがわかった。

「ダート！何が起こっているの?!怖い！」

しかし、ダートは逃げ惑う人達にぶつかりながらも、一番最初に悲鳴の上があった場所へと向かう。

「ダート!!」

「静かに。大丈夫ですから」

そう言われて連れて行かれる。

もう人は居ない。

床に血を流して倒れている貴婦人。

その傍らに立つ、見たこともない男。

身なりは悪くない。

むしろ良い方だろう。

男の持つ刃物からは、血が滴り落ちている。

ぎろりと血走った瞳が、真綾とダートを捉えた。

「あっ……」

銀髪で群青色の瞳

「何の騒ぎだダート！」

遅れて大広間に来たガウディオとルノアールは、キョロキョロと周囲を見渡した。

「っ……！お父様？！何故ここに」

ルノアールは、慌てて自分の父親の元へと駆け出した。

辿り着く途中、床に転がる夫人と父親の持つ血の付いた刃物を見て……ルノアールは瞬時に理解した。

「お父様、何をしているのです！こんな事をして……！」

「帝国に復讐するんだよ。この日の為に、仲間も連れて来てやったよ……」

ルノアールの細い肩を掴み、叫びながら言った。

「仲間？」

誰かが、そう口にした時。

ガラス張りの天井が大きな爆音を立てて割れ始めた。

「きゃああああっ!?!」

身の危険を感じて、真綾はしゃがみこんだ。

頭上の巨大なシャンデリアが乾いた音を発しながら緩く揺れて真綾のもとへと落下してきた。

ダートは、真綾から距離を開けていたために伸ばした手が届かない。

「くっ…間に合いませんね…」

クリスタルガラスの破片がスローモーションに飛び散る。

真綾の頬を破片がかすめてピッと走った裂傷。

「あっ………」

ダートは、両手を素早く突き出すと、手のひらから光の球を真綾めがけて放った。

落ちてくるシャンデリアぎりぎりまで、光の球は真綾に直撃すると、光の膜が覆った。

「真綾ーッ!?!?!?!」

ガウディオは素早い動きで真綾のもとへとかけよった。

周囲の時間が止まっていることにガウディオは気づいていない。

ダートは、遠隔で真綾の足元に幾何学的な紋様を描いていく。

シャンデリアは不自然に宙に浮いたままで、真綾は頭を押さえ震えていた。

ガウディオが真綾を覆う膜を外側から叩いた。

激しく耳に届く音に恐々顔を上げた真綾はガウディオを見つけて目を見開いた。

「ダート！この魔法を解除しろ」

ガウディオはダートに向けて怒声を放ったが、ダートはガウディオに視線を向けることなく紋様をを描き続ける。

「真綾、待つてる。今助ける」

「.....」

真綾の口は動くが声が聞こえてこない。

勿論真綾にもガウディオが何を言っているのかは聞こえていなかった。

ガウディオは周囲に膜を破壊できるものはないのか探していると膜の内側から叩く音が耳に入った。

「.....」

視線を向けると真綾が柔らかく微笑みながら、間をあけて唇を動かした。

繰り返し言葉を紡ぐ唇をガウディオは見続けた。

自身も同じように唇を動かし、息を呑んだ。

「ガウディオ陛下下！！時間が動きます。離れて下さい！」

幾何学的な紋様が綺麗に真綾の足元に描き出されていた。
「ミシッと乾いた音が再び聞こえてきた。」

ガウディオが宙を仰ぎ見た瞬間――

シャンデリアが落ちてきた。

散り散りに散ったガラスが飛び散る。

時が動きだし、配備されていた隊員達が反乱分子を次々に捕らえていった。

「真綾っ…真綾」

巨大なシャンデリアを退けようと素手で持った為に、手のひらは傷だらけになる。

「ダート！何をしている。真綾を助けなければ」

至って落ち着き払っているダートに怒りがこみ上げてくる。

「陛下、ご安心を。一旦元の世界に帰しました」

「何だと？」

ダートの、その一言で頭の上っていた血液が一瞬に冷えた気がした。

光がわたしを包み込んで

目を開けた時、そこは

「ダート！俺を真綾の元に！」

「無理です陛下！地点設定には膨大な精神力を使います。先程真綾様を地点指定で送った事により…暫し…の…」

ダートは最後を言い切る前に、その場に倒れてしまった。

どうすればいい?!

真綾!!

「ガウディオ陛下」

「パーティータか…」

「申し訳ない。親父がこんなバカな真似するなんて…」

「気にするな。刺された婦人も急所を外していたし大事なだろう」

「すまないなガウディオ。後の収集は俺達に任せてくれていい」

「ああ…頼む」

あれは、やっぱりわたしのゆめだった？

夢落ちだなんて夢見が悪過ぎよ…

ニュースにカレンダー

全てがあこの時から止まっていたみたいで

わたしが帰って来た事によって

再び動きだしたみたい…

薬指にはまっているプラチナの指輪は輝きを失わず輝いていた。
夢ではないと。かたっている様だった。

そんな感じがした。

時間は経つても、わたしの中にはぽっかり穴が空いたままで。

三学期が始まって、どこか上の空。

あれから直ぐに寒い冬に入り
青々しい季節が巡った。

わたしの悩んでいた進路は高校からのエスカレーター式で大学へと進学する事にした。

長い髪を短く切り新しい気持ちで

わたしは、大学へと向かった。

時々思い出す。

あの夢のような世界の事を

全てが初体験だった。

あの月日は、わたしの忘れたくても忘れられない永遠の思い出。

思い出にはしたくなかったけど…

入学式まであと三十分以上も時間がある。

随分早く来すぎてしまったらしい。

大学内を詮索しているうちに中庭に来てしまっていた。

何気なく見上げた空に入る桃色の葡萄の房をかたどったもの。

見覚えがあった。

「あつ……この花……」

綺麗に咲き乱れる花々を見て、ある木に目が止まった。

木に咲く花なんだ。

少し照れくさそうに差し出して付けてくれた花の髪飾り。

今でも鮮明に覚えているあの日の出来事。

「向こうにあった花と同じ……？不思議。本当に木から咲く花なんだ」

少し腕をのばした。

しかし壊れそうに儂い花に一瞬躊躇って腕を下ろした。

「いや…それは全く違う花だ」

あっ……

風が一瞬きつくなり短い髪が僅かになびく。

振り返った視線の先

金髪碧眼に黒のストライプの入ったスーツを着こなした男性。

「俺が居ない間に好き勝手してくれたな」

会うなりガウディオは大層機嫌が悪く

わたしの傍に歩み寄ってくると、長くて綺麗な指でわたしの短くなつた髪に絡めた。

「こんなに短くして……」

「…ふっ…んっ…」

こらえていた涙がとめどなく流れてくる。
頬に触れる繊細な指先
近くにいるだけで感じるガウディオの体温
唇を噛みしめると隙間から嗚咽が漏れた。

夢じゃない。

この温もりも。

息づかいさえも。

「迎えに来た

真綾」

ガウディオは、そう言って深い深い口づけをした。

木き五ご倍ばい子し花言葉：再開

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8670p/>

返り咲くこと風花の如し

2011年1月10日21時23分発行